

フランク・ステラ 《不整多角形》シリーズ—ドローイングと複製の問題再考—

田儀佑介（神戸大学）

戦後アメリカの抽象美術を代表するフランク・ステラは、1965年頃からそれまでのモノクロームのストライプパターンによる平坦な絵画と大きく異なる〈不整多角形〉シリーズの制作を開始した。1965年頃という時期が、折しも「絵画的」イリュージョンを拒絶するミニマル・アートや錯視的効果を追及するオプ・アートが台頭した時期と重なっていたことから、〈不整多角形〉シリーズは発売当時から毀誉褒貶がありながらも、そのイリュージョンの様態が焦点化されていた。またそうしたイリュージョン自体を作品の評価と結びつける言説に対し、当時自身の美学を確立しつつあったマイケル・フリードは、空間決定の多義性としてイリュージョンの性格を分析しつつも、本シリーズの重要性を絵画の「形態」に見出すことで〈不整多角形〉シリーズがモダニズム芸術であることを強調した。

こうした当時の議論をふまえつつ、従来の研究は〈不整多角形〉シリーズ以降の画業をそれまでのストライプ絵画と区別し（アルフレッド・バックマン、1988年）、「イリュージョンの再導入」（ブライアン・ケネディー、2011年）として整理してきた。本シリーズを様式的にマレーヴィチとエル・リシツキーの間に位置づけるマイケル・アウピングによる最も近年の研究（2016年）も含めて、作品のイリュージョンの様態やその視覚性がつねに争点となってきたことは否定し難い。しかし、これら先行研究における作品の分析は、作品の生産過程を示すドローイングの存在を等閑視してきたように思われる。とりわけ、本シリーズ、あるいはその前年にあたる64年頃のドローイングにおいて、重力への関心が示されていたことは注目に値する。またステラ自身が、作品発表時の批評において形体の重ね合わせや多彩色の採用によってもたらされるイリュージョン的性格のみが焦点化されてしまっていたことを嫌っていた事実も看過できない。

そこで本発表では、ステラが64年前後に遺したドローイング、さらには67年にステラが手がけたマース・カニングハムのダンス作品《スクランブル》の舞台装置と衣装デザインとを検討することで、〈不整多角形〉シリーズにおけるステラの試行錯誤がイリュージョンの導入ではなく、幾何学的形体の間に生まれる諸力の均衡・反発・拮抗といった力学的な性質の探査であったことを指摘する。さらに、従来の研究が等閑視してきた〈不整多角形〉シリーズが有する作品自体の反復という側面にも焦点を当て、この反復が「消費を特徴づけている自動的で機械的な反復」というだけでなく、64年頃よりニューヨークで顕在化し始める「ヴァナキュラー」なものへの関心、つまり無名の工匠によって建てられた、地域に散在する、伝統的な様式をもたない散漫な建造物への関心と交錯するものであったことを指摘したい。